

氏名	佐々木 亘
学位の種類	博士（宗教思想）
学位記番号	人博乙第2号
学位授与の日付	平成26年11月26日
論文題名	共同体と連帯性ートマス・アキナスにおける神的共同体ー
審査委員	主査 （教授）鳥 巢 義 文 （教授）坂 下 浩 司 （教授）西 脇 純 （教授）桑 原 直 己（筑波大学） （名誉教授）大 森 正 樹（南山大学）

1. 論文の内容の要旨

本論文はトマス・アクィナスの共同体理解の特徴を、共同体を構成する人間本性の考察、共同体における人間の相互関係の考察、そして共同体において連帯する人々の究極目標である神への超越の可能性の考察などをおして明らかにすることを目的とする。

本論文は、序に続く4部で構成される。その第1部は神的共同体とペルソナ、第2部は神的共同体と自然法、第3部は神的共同体と正義、第4部は神的共同体における連帯性についてであり、終わりに結論が述べられる。

第1部では、神的共同体は神を根拠とし、また究極目的とする共同体であることが論じられる。そこにおいて神は共同善であり、この共同善へ向かう人間の運動は一方で神の摂理と統率のもとにあり、他方で人間の自由と主権のもとに展開される。人間の理性を超えるところは神の啓示により人間に知らされており、それは神から人間に与えられた永遠法といわれる。人間は父なる神の完全な像 (*imago*) である御子との関係において「神を範型とする像 (*imago*)」である。そして、主 (*Dominus*) である神またキリストとの関係から「自分のはたらきの主権者 (*dominus*)」でもある。さらに、人間は神に向けて自分を「隷属者 (*servus*)」と位置づけることにより、神へ向かう道であるキリストにならい、共同体における他者との連帯が可能となる。このような人間には「ペルソナ (*persona*)」という呼び名が与えられている。

第2部では、神的共同体において人間を共同善である神へと秩序づける規則また基準としての自然法について論じられる。それは、神が諸事物を統率する理念である永遠法の人間における分有であり、人間には善悪を判別する自然本性的な理性の光が属している。それは従属する者を神認識や社会生活における固有の徳へと導くような神的刻印である。徳は徳を有する人間を善き者にするが、それは神への傾きであり、対神徳である愛徳がこの秩序づけを完成すると考えられている。

第3部では、共同善への秩序づけには正義という徳が関わると論じられる。徳の中で人間を他者との関係において秩序づけるのは正義であり、これは他者へと正しく関係づけられているという均等性 (*aequalitas*) を意味する。また、人間が神を範型とする像であるかぎり、自然本性的な愛によって神を愛することへと秩序づけられているが、これは共同体における他者への秩序づけを通じて、ペルソナである人間同士がともに助け合うことを介して、導かれる状態のことと述べられる。

第4部では、神的共同体における人々の連帯性が論じられる。聖なる教えは人間の救いのために、人間の理性を超えた目的へと人々を秩序づける教えである。この秩序づけは対神徳によって現実のものになる。共同体の部分である個々人の連帯は、他者との助け合いに基づく連帯性をもたらす。この連帯性によって、個々人の自然本性を超えて完全性へと向かう運動は、共同体全体の運動として展開されることになる。

結論では、全体を総括したあと、人間の神的可能性は、個としてのペルソナに対してで

はなく、他者への均等性を前提とした共同体の部分としてのペルソナに対して開かれてい
ると結ばれる。

2. 論文審査の結果の要旨

本論文は 4 部を神的共同体に加えて、ペルソナ、自然法、正義そして連帯性という鍵語
によって特徴づける仕方で展開している。各部をとおして描かれるのは、人間存在が主権
者 (*dominus*) でありながら隷属者 (*servus*) であること、さらに神の御子の像 (*imago*)
またペルソナであることである。このような人間が、至福を目指す共同体の一員として自
分を位置づけ、自らの有する自然法による神への方向性と正義による他者への関連性を自
覚し、神の助けのもとで相互に助け合い、他者との連帯を通して全ての人々の至福へ向か
うことにより、人々の共同体は神的共同体として姿を現すことになるということである。

本論文は、以上のような共同体理解を可能な限り法や徳に関連する概念を用いて論証し
ようと試みている。また、人間の主権者であることを表現するために自助、人間が連帯し
助けあう必要のあることを表現するために共助、そして人々全体に及ぶ神の助力を公助と
それぞれを言い換えることを試みている。これはトマス解釈としては著者独自のアプロ
ーチであり、興味深い視点といえる。その妥当性も含めてさらなる研究課題となる。一般社
会との関連で神的共同体の可能性を問おうとしている点は、本論文の試みの独自性として
高く評価できる。

一方、神のもとでの人々の交わりである共同体を説明するために有効と考えられる、教
会論、秘跡論また福音書に描かれた愛の視点に基づく共同体論の展開はやや希薄である。
本論文はこの点を自覚している。それにもかかわらず、自然法や正義の概念をめぐるトマ
スのテキストを十分に分析した上で優れた論考を行っていることは、トマスの共同体論を
教会の外に向けて解き明かそうとする本論文独自のアプローチとして高く評価できる。

また、本論文が多くの先行研究を確認した上で、基本的にトマス・アクィナスのラテン
語テキストを自ら綿密に読み込むことをとおして論考を展開していることは、著者の研究
者としての十分な力量を示すものであり、本論文の特徴の一つとして高く評価できる。

平成 26 年 10 月 23 日

主査 (教授) 鳥 巢 義 文
(教授) 坂 下 浩 司
(教授) 西 脇 純
(教授) 桑 原 直 己 (筑波大学)
(名誉教授) 大 森 正 樹 (南山大学)